連載

観光まちづくり最前線 No.7 地域を歩くレポート

子どもの目線で地域を知ること・地域を観ること・地域を思うこと ～少子高齢化時代に、こどもはまちづくりの貴重な戦力・担い手に・・・

帝京大学　経済学部　観光経営学科　大下ゼミ

若者・外者・馬鹿者が地域を元気にすると言われています。確か小学校４年生の頃、総合学習の時間に地域の研究をしたことを思い出しました。若者の気を惹くまちづくり、それは小学生の頃から仲間入りすることが効果的では・・・・今回は、小学生の観光まちづくりの取り組みについての研究と実践から観光まちづくりをレポートします。

■子どもの観光副読本に共通していること

『観光立国宣言』以降、総合的かつ計画的に講ずる施策の一つとして「観光地域づくりの人材の発掘と活用」が掲げられています。しかし以前より、宮崎県、沖縄県などの観光を主要産業とする地域では、小学生向けの観光副読本を作成し、郷土への理解と愛情を育てる取り組みを展開していました。

今回、観光まちづくり教育を研究する一環として、宮崎県・沖縄県の他に、長崎さるく、京都市内、天草地域等の様々な先行地域での観光まちづくりテキストを集めて分析したところ、「文字が多すぎて余白部分が少ない」「作業帳（ワークブック形式）のように自分で調べたことが書き込めない」といった観光副読本に共通した特徴がありました。読者である子どもたち、あるいは子どもたちに近い年齢の学生たちの声が反映されていないと感じられました。

沖縄県の観光学習教材の表紙は「ホエールウォッチング」

■いろはカルタをツールにまちづくり観光読本の企画に挑戦（千葉県香取市佐原）

本情報誌に度々紹介されている千葉県の佐原で子ども向けのまちづくり観光読本を作成しようとしていると聞き、私たちの目線で何か企画ができないかを考えることにしました。佐原では、群馬県内では当たり前となっている「地域カルタ」を作られたばかりでした。そこで、この「佐原いろはカルタ」を題材に、物語的に観光読本を構成・企画しました。

佐原に住んでいる祖父母を訪ねていった姉と弟が、近くの観福寺の森で一枚のかるたを拾う。拾い上げた途端、「Dr.しげ」という物知り博士の妖精が登場し地域の魅力を伝授。姉弟はまちなかを巡り、落ちている「地域かるた」から様々なことを知るという内容です。漫画とかるたで佐原の情報を伝え、自ら調べた内容も書き加えることで、分かりやすく、そして興味をもって主体的に冊子を読み進めるという形式～自分たちが子どもの頃を思い出して、こんな副読本だったらもっと勉強しただろうの反省を、観光読本に盛り込み提案することに努めました。

佐原いろはカルタをヒントを得て、子どもが興味をもつまちづくり観光読本づくりに取り組みました。

■地域に関心をもつイベントの開催～プラバンでオリジナルキーホルダーづくり（千葉県多古町）

観光読本を片手に関連したまちなかでのお宝発見イベントも企画していましたが、その実現までは至りませんでした。しかし、佐原（香取市）に隣接した多古町で、空き店舗を利用した子ども向けのイベントを企画・実践しました。

多古町はアジサイで有名な町です。梅雨の時期になると美しいアジサイが咲き誇り、訪れる人々に感動を与えています。町では「あじさい祭り」というイベントを毎年開催しており、私たちはそのあじさい祭りで、子どもたちが参加することを目的とした、プラバンでオリジナルのキーホルダーを手作りできるお店を開き、町おこしに参加しました。子どもに興味をもってもらうため、プラバンに自由な絵を書いてもらいましたが、アジサイなどの多古町にゆかりのある絵を描いてキーホルダーにしたら、もっと自分たちの町に愛着をもてるなと思いました・・・アジサイはちょっと難しいかな？。

子どもの目線で一緒にプラバンでお絵かきを指導 ??、というより一緒に楽しみました!!

子どもからの観光まちづくり。少子高齢化の時代に大切なまちづくりの担い手になると思います。そこで大切なことは、大人の常識を押し付けないことではないでしょうか。探検感覚、ゲーム感覚の中で、いつのまにか地域のことを知る～そんな子どものまちづくりは、子どもに比較的近い大学生や高校生のアイディアの中にもあると思っています。

（◎ Yamaneko⇒[本渡由真＋YDK]⇒佐藤（英）TEAM）